通常の学級に在籍する自閉症スペクトラムのある小学２年の児童に対して通級による指導を活用して社会性に関する指導を行った事例

１．事例の概要

Ａ児は、Ｂ小学校の通常の学級に在籍する、自閉症スペクトラムの診断がある小学２年生である。本事例では、Ａ児が、Ｃ 小学校の通級による指導を活用しながら、社会性等について学習した事例である。Ａ児は幼稚園在籍時から、対人関係やコミュニケーションに困難さがあった。小学校に入学後、通常の学級で、学習面や学校生活面での困難さが現れるようになった。そこで、学級において、見通しを立てる、視覚的な情報を意図的に取り入れるといった指導や支援と、個別の配慮や支援を継続的に行っている。通級による指導では、社会性、対人関係、コミュニケーションに関する能力の育成として、週一回ソーシャルスキル指導を中心に受けている。通級による指導の担当教員と担任、保護者は、毎週ファイルのやり取りで情報を共有して、通常の学級での支援に生かしている。さらに、それぞれの教員が相互の授業を参観したり、情報交換をしたりすることでＡ児に対する指導、支援に生かしている。

キーワード　自閉症スペクトラム、小学校、通級による指導、社会性

２．児童の実態

Ａ児は就学前に、医療機関において自閉症スペクトラムが診断された。通常の学級に在籍し、通級による指導を利用している。Ａ児は、注意集中の維持、社会性、対人関係、言葉によるコミュニケーションに課題があり、学習面でも様々な配慮が必要である。視覚支援や注意喚起を促す等、活動の見通しを立てて、安心して活動したり学習したりするための支援は常に必要である。抽象的な思考を伴う問題は、理解するのに時間がかかる。注意集中の困難から、指示を聞きもらすことが多々あり、個別の言葉かけを必要とする。

３．本事例に関する基礎的環境整備

○　Ａ児はＣ小学校の通級による指導を、週に一回利用している。そこにはＡ児の他にも他校から通級している児童が数十名おり、Ａ児は同学年の児童数名と一緒にソーシャルスキル指導を中心に受けている。【基礎１】

○　Ｂ小学校では、校内委員会の他、各学年に特別支援小委？員会（以下、「小委員会」という）を週一回の学年会の中に位置づけ、要支援児童についての共通理解と支援方法について検討している。また、通級による指導の担当教員は毎週、指導の様子をファイルにまとめ、Ａ児の担任と保護者と情報共有し、それぞれの場で生かせるようにしている。学級担任は通級による指導を定期的に参観している。【基礎２】

○　個別の指導計画の作成に当たっては、小委員会で児童の障害特性や教育的ニーズについて共通理解し、支援内容を検討している。【基礎３】

４．合意形成のプロセス

Ａ児の支援は、前年度の１月に保護者が合理的配慮協力員に支援要請し、合理的配慮協力員が巡回相談することから始まった。Ａ児の保護者は、各関係機関と連携しながら、学習面や対人面の支援について考えていくことを希望していた。そこでまず、保護者と担任、合理的配慮協力員の三者での教育相談や、学年会、校内委員会を通して個別の指導計画を作成し、支援を具体化した。その内容を、全教員で共通理解をすることで、在籍学級だけでなく、あらゆる場面での支援が可能になった。今年度は保護者の希望もあり、保護者、担任、合理的配慮協力員に、特別支援教育コーディネーターが加わった四者での教育相談を行い、さらにＡ児に対する支援を校内に広げることができた。

５．合理的配慮の実際

○　通常の学級の授業では、学級全体に対して、授業のユニバーサルデザインに当たる指導や支援（例えば、板書を書きやすいように内容を線で区切る、視覚的手がかりで注目を引く等）、個別の配慮（例えば、Ａ児の座席を教室前方にする、活動の手本となる児童の隣にする等）とを組み合わせて行った。【合理①－１－１】

○　家庭での漢字の練習課題として、練習ノートと同じマス目にした手本に、漢字を書いて提示した。また、保護者にその日の家庭学習の内容を知らせるようにした。Ａ児の文字が雑になった際は、「濃い字で書いてみよう。」と声掛けを工夫した。【合理①－１－２】

○　学習や生活の中で、言葉に絵や写真を添えて説明するようにしたり、具体物や半具体物を使っての操作活動を積極的に取り入れたりした。【合理①－２－１】

○　Ａ児が通級による指導を受けた後は、担任は「よくがんばったね。」と声をかける等、担任や他児との肯定的なやり取りを作るようにした。【合理①－２－３】

○　Ａ児が通級による指導を利用することを周囲の児童に知らせ、Ａ児が特性に応じた多様な場での学習を行っていることについての理解、啓発を図っている。また、Ａ児が学校生活で困っている場面を見かけたら、大人の介入なしに児童同士で解決できる場面を作っている。さらに、Ａ児が学校全体で支援をしていく必要がある児童という共通認識のもと、Ａ児の実態や関わり方、保護者の支援の在り方等について、教員間で共通理解を図った。【合理②－２】

６．本事例の成果と課題

Ａ児にとって効果的な支援を授業に取り入れると共に、授業のユニバーサルデザイン化を心掛けることで、Ａ児に限らず、学級全体で学習への意欲向上が見られ、学習の定着につながった。それにより、学級全体の自己肯定感が上がり、友達と認め合う場面が多く見られるようになった。また、担任、保護者、特別支援教育コーディネーター、合理的配慮協力員の四者による教育相談を複数回実施したことで、担任と保護者だけでなく、専門的見地からの指導・助言を受けることができた。さらに、Ｂ小学校の教員全体で、Ａ児の実態や状況を共通理解することができた。今後の課題は、通級による指導が設置されていないＢ小学校において、より一層充実した校内支援体制の構築、各関係機関や諸学校等との密なる連携と考えている。